

## 宮本 輝 「道頓堀川」論

——道頓堀の影響および武内と鈴子の物語——

藤 村 猛

### はじめに

「道頓堀川」(全十一章)は二人の男—喫茶店のオーナー・武内鉄男(五十歳)と、バイトの大学生・安岡邦彦(二十一歳)—の織りなす物語であり、彼らに絡むのが武内の妻・鈴子や邦彦の恋人・まち子たち、および武内の息子・政夫や友人の杉山たちである。この作品では、主人公二人の物語の他に、武内と政夫の父子の物語、武内と鈴子の夫婦の物語、邦彦とまち子の恋人の物語などがあるが、中心は主人公たちの物語と武内と鈴子の物語である。

作品に描かれた時間は、昭和四十四年の秋から大晦日までであり、それに登場人物たちの回想が挿入され、過去と現在が巧みに描かれている。

「道頓堀川」は前作の「泥の河」や「蜚川」と比べて、主人公の複数化によって作品の求心力が弱く、邦彦の消極性や孤独感、そして武内の鈴子を殺したとの罪悪感などによって、作品が内向きであり、また場所が繁華街であるため、「蜚川」のような詩的な自然描写

が少ない。そのせいか研究論文も多くないが、特徴として前二作以上に、男女の孤独や性が時間の幅を持って描かれている。本稿では、道頓堀(川)が主人公たちにどのように影響しているか、そしてこの地で展開される男女の愛憎を、武内と鈴子の物語を中心に考察する。

### 一 邦彦と道頓堀(川)

邦彦は両親を亡くし、生活のために武内の喫茶店リバーで、二年近くバイトをしている。彼は大学四年生で就職活動中だが、これといった進路の展望を持たない若者で、物思いにふけて川を見る<sup>(2)</sup>男である。本来、道頓堀での生活は従前の生活である筈なのに、彼のキャンパスライフはあまり描かれな

ない。彼の見る道頓堀川は、作品冒頭で次のように描かれる。

夜、幾つかの色あざやかな光彩がそのまわりに林立するとき、川は実像から無数の生あるものを奪い取る黯い鏡と化してしま

う。不信や倦怠や情欲や野心や、その他まといついているさまざまな夾雑物をくると剥いで、鏡はくらがりの底に簡略な、実際の色や形よりもはるかに美しい虚像を映し出してみせる。だが、陽の明るいうちは、それは墨汁のような色をたたえてねっとりと淀む巨大な泥溝である。(一)

昼間は「ねっとりと淀む巨大な泥溝」(一)であり、「殆ど流れのない、粘りつくような光沢を放つ腐った運河」であるが、夜の道頓堀川は違う顔を見せる。「川は実像から無数の生あるものを奪い取る「暗い鏡と化」し、邦彦はまち子とともに、幸橋から「道頓堀の光彩に見入」(五)る。

川に光はなく、それは歓楽街に伸びて行く底深い一本の道に見えた。道は橋々をくぐって後方の、遠い高層ビルの方にまでつづいて行く。苔や青みどろに覆われた太い材木が浮かんでいたが、それも道に捨て置かれた黒い岩のようである。道の果てに四角いスクリーンがあつて、そこにぼつんと七色の光が映し出されているのだった。なるほど、自分はあるところで生きているのかと邦彦は思った。あんな眩しい、物淋しい光の埒塙の中できているのか。(五)

道頓堀境界のネオンが「物淋しい光の埒塙」と捉えられるのは、邦彦の心情(孤独感)の投影故であろうが、まち子との接吻の後の回想(五)でも同様の感慨が語られる。

眩ゆく華やかな眺めであった筈だったが、邦彦には、かつて見たこともない冷え冷えとした、ひどくちっぽけな景観として心に甦って来るのである。色とりどりの光をまとった船が、暗い海原に出航して行き、それを視界から消え去るまでじつと見送っていた、そんな空虚な淋しさがまといついで、邦彦は幸橋から見えていた夜の道頓堀が、人気のない一艘の満艦飾の船みたいだったように思えるのだった。(五)

「かつて見たこともない冷え冷えとした、ひどくちっぽけな景観」や「空虚な淋しさがまといついで」などは道頓堀の一面であり、邦彦の人生観の反映でもあろう。彼は定住者・武内とは違い、偶然のように道頓堀の住人になったのであり、就職してこの地を離れる可能性が高いし、彼は恋愛に溺れる性格ではない。

彼の根無し草としての孤独感は、繁華街故に深まる。彼はこの地で何人かの女性たちと出会い、別れる。作品最終部では水商売のまち子と結ばれるが、それ以外の女性たち―弘美・由紀子・さとみ<sup>(3)</sup>―とは別れを体験する。父の愛人であった弘美との別れは、次のように描かれる。

心斎橋筋の人波の中で、弘美は振り返って何度も手を振り頭を下げた。姿が見えなくなると、邦彦は不思議な淋しさを感じた。もう二度と逢うことのない人が、いままさに去って行ってしまったという寂寥感であった。(八)

由紀子（父の知人・金兵衛の娘）との別れの場面も、同様の趣を持つ。

由紀子のうしろ姿は、たちまち人の群れの中に消えた。酔い醒めの不快な気分がいつまでも邦彦の中に溜まっていた。彼は地上への階段を昇って行きながら、きょう一日で、たくさんの大切な人と別れてしまったような錯覚を抱いていた。（八）

女性たちと別れる彼が見る道頓堀が、「淋しい」のも自然かもしれない。だが、彼は道頓堀に牽きつけられている。

偶然手に入れた老人の手帳の詩を見ながら、彼は雑踏の人々に「自分」を見る。

船に乗っていく

別々のところで生まれた

別々の心の

俺という数千人が

同じ船に乗り合わせて

流れて行く

邦彦は、この短い文章になぜか心惹かれた。川ぞいの窓辺に凭れて、歓楽街の賑いを眺めつづけていると、見知らぬ他人の群れが、どれもみな自分自身であるかのような思いに駆られる。人々のうしろ姿は影が薄く、あてどなく急ぎ足で、寂し気に見

えた。別々のところで生まれた、別々の心の、言葉すら交わすことのない自分という数千の人間たちが、流れ過ぎては雲集して来るのだった。それはみな自分だと邦彦は思った。（三）

他者の「貧しさ・寂しさ」に惹きつけられ、共感を抱いている。だが、彼は金が重視される繁華街（人々）に、好感を持っているのではない。彼がまち子と結ばれた夜、彼女の店（「梅ノ木」）にやって来た男たちは「金、ほしいなア」と言い合う（十）。それは「終戦後の、あの闇市の臭気と喧噪」（十二）のエネルギーと通じるが、「すさまじい汚濁と喧噪」と墮すとき、邦彦はこの街から出たいと思う。

まち子の手が、邦彦の髪をかきあげた。邦彦は、さとみはいたいどうしているだろうかと思った。あれ以来、邦彦は一度もさとみと逢っていないかった。あいかわらず、バーやクラブを渡り歩いて白く柔らかな裸身をくねらせて生きていることだろう、そんなさとみの姿が目には浮かぶようだった。さとみの涙がある重い意味を持って、邦彦の脳裏に甦った。その瞬間邦彦は、このすさまじい汚濁と喧噪と色とりどりの電飾板に包まれた巨大な泥溝の淵から、なんとかして逃げて行きたいと思った。それは思いのほか困難な仕事のような気がした。彼は青い炎に目をやった。炎は丸い輪になって踊っていた。幫間のうしろ姿がまた目に浮かんだ。（十）

まち子との情事の後に、まち子の裸からさとみが連想され、彼はさとみの悲しみを想う。彼の恋愛は、女たちの悲しみに敏感であり、「帮間のうしろ姿がまた目に浮か」ぶように、性に溺れることを厭っている。

だが、邦彦が道頓堀から逃げ出せるかどうかは、まち子との関係が生じた後では、武内やリバーのこともあり、「思いのほか困難な仕事」となる。

道頓堀は通過者として邦彦に、人々の「寂しさ」を感じさせ牽きつけるが、彼は魅惑を感じつつも逃げだしたいと思っている。

## 二 武内と道頓堀

武内は邦彦と違い、四十年近く道頓堀で生活を送ってきた。道頓堀の変遷と彼の人生が密接に絡まっている。ただ、現在（昭和四十四年）の道頓堀は人情味に薄く、昔は人間味あふれた地域だったと、彼は回想する。

昔の道頓堀には、何かもつと温かい、冷えた体を包み込んでくれる人間たちのにぎわいがあったような気がした。無頼の生活も、ここではちゃんと一つの生き方であった。(一一)

そして、戦後の道頓堀はエネルギーに満ちていた。

御堂筋を挟んでぼつんぼつんと煉瓦造りのビルが残っている程

度で、あとは瓦礫と焼け跡だけの、商都の残骸だった。しかし、またたくまに無数のバラックが建ち始め、生き残ったものたちのすさまじいエネルギーが敗戦による虚脱を包み込み、道頓堀界隈は、たちまち夢や欲望や野心をむき出しにした得体の知れない人間どもで満ちあふれた。(一二)

だが、歓楽街の道頓堀には、人間を駄目にする要素がある。武内は邦彦を愛情を持っているが、次の文章は、道頓堀が若者に与えるマイナス面を示す。

武内は、邦彦に似た若者を、何人もこの道頓堀で見てきたような気がした。柔かそうな外貌の奥に、一種危険とも思える暗さと険しさを隠している。それは両親に早く死に別れて、他人の飯を食って成人した武内が、この道頓堀を徘徊し始めた青年時代にやはり同じように持っていたものと紙一重だった。邦彦とどこかで相通じるものを持った青年たちが、幾人もこの歓楽街で色艶を失っていったさまを、武内は自分の来し方と重ね合わせて思い起こした。(一三)

「一種危険とも思える暗さと険しさ」を持つ若者たちが「色艶を失って」く。そして、邦彦を見ながら、彼に足らないものは、「ふくよかさ」(一四)だと武内は想う。

淋しい顔だなと武内は思った。眉も太く、目も長く大きく、鼻

筋もきちつと通ってやさしそうな顔立ちなのに、どこかに何か足りないものがあつた。(中略) それは、ふくよかさであつた。

この道頓堀で武内が知り合つた数多くの人間たちは、みな相貌の奥に、生まれついてたずさえているとしか言いようのない、ある共通した貧しさを持っていた。その貧しさが、いつか必ず自分を裏切る者しか愛せなかつたり、自分を不幸におとしめていく者としか友人になれなかつたりさせるのだつた。そうした人間同士が、好むと好まざるとに関わらず結びついて流れ落ちていくさまを、武内はもういやというほど見てきたのである。

(一一)

「ある共通した貧しさ」が人間を不幸にさせると、武内は思っている。だが、彼は不幸になる人々を嫌悪しているのではない。彼を裏切つた鈴子ですら、彼女の死後には愛おしさを感じる。やはり、武内は道頓堀の人々に連帯感を抱いている。(邦彦の場合は裏切る者はおらず、武内はもちろん、亡き父の関係者である弘美も金兵衛も思情的である。)

作品最終部では、武内は「たとえ本人がどんなに拒んでも、邦彦を自分のところを引き留めておこう」と思つて<sup>(4)</sup>いる。武内の愛情は、鈴子や政夫と同様に、邦彦に注がれていく。道頓堀は時代によって違う顔を見せつつ、彼らを強く牽きつけているし、その共同体から離さないようにしている。

### 三 鈴子と武内——出会いから出奔まで——

この作品のヒロインと言えば、武内の妻・鈴子であろう。邦彦は女性に憧れているが、行動力がある方ではなく、まち子との仲も始まりに過ぎない。

武内と鈴子の出会いは昭和二十一年であり、彼はその頃千日前にバラックを建て、日用品屋を営んでいた。戦後の混沌——喪失とエネルギーの奔流——が二人を結びつける。

そんな頃、彼はひとりの女と知り合つた。武内より三つ歳下だつたが、夫を戦争で喪つた寡婦であつた。あばずれの下司っぽい女たちしか知らなかつた武内は、一見おきやんそうに見える、そのじつ言いたいことの半分も口に出せない、まだ娘っぽいつとを残しているその女を好きになつた。女も頻繁に武内のもとにやって来たが、彼にはそれが日用品を購入するためだけでなくなさそうに思えてきた。女は何も買わずに帰つて行くことが多かつた。

(一二)

武内は鈴子の「純情そう」だが、「酸いも甘いも知り抜いている女のあざとい媚び」に驚く。彼は「三週間しか夫と一緒に暮らさなかつたとはいえ、やはり女がもう娘ではないことを思い知る。彼の想像の中で、彼女の化粧した顔立ちは「意外に危なっかしい素顔」を見せ、「かすかな不安」を持つが、肉体への欲望から彼女との関係

を深める。とはいえ、彼は彼なりに尽くしている。

武内は自分の儲けた金で、鈴子の望む物を殆ど買ってやった。鈴子はそれらを、実家の両親に嬉しそうに持って帰った。そしてあたかも代償のように、武内の求めに応じて拒むことはなかった。

武内は天王寺に家をもつて来て、そこで鈴子と暮らすようになった。二人が戸籍上正式な夫婦になったのは、二年ばかりあとのことだったが、それまで武内は鈴子の家族の衣食のすべてに責任を負って懸命に働いたのだった。

(二二)

彼は鈴子の体に耽溺するが、鈴子は恥じらいながらも、性的不満を漏らすようになる。戦前にはなかった、敗戦(喪失)による生(性)の沸騰が影響していよう。

何人もの女を知っていたが、武内は鈴子によって初めて女の体を知ったような気がした。だが、同時に武内は、鈴子という愛しい女のそこかしこから、何かしら底知れぬものを感じていたのであった。

「いっこも、気持ええことあらへんかった」  
ある夜、鈴子はそう言って寝返りをうち、すねたように背を向けた。

「うち、もつと気持のええ思いがしてみたいねん」

(中略)

戸板の隙間から差し込む光が、鈴子の張りつめた尻を浮き上がらせ、そこに人間の顔を思わせる丸い影を作っていた。武内は、その形相に長いこと見入った。

(中略)

この女は、男が好きなのだと思った。しかもそれが自分の妻であるという当惑があった。武内の上でせわしげに動き出した鈴子の体を両の手でつかみながら、彼はさつきそこに浮き出た不思議な顔こそが、鈴子の素顔なのに違いないと思った。

(中略)

武内は、鈴子からもう決して離れられない気がした。この体だけで充分だと思ったとき、さっきの冷たい感触が、心の中に戻って来た。かつて味わったことのない、淋しい、どこにも逃げ場のない孤独感であった。

(二二)

女の持つ性の深遠さと、それに対する男の不信や孤独が描かれる。それは生―性の存在による。だが、この作品では女性の快感は描かれるが、男性たちの快感の描写はない。邦彦もまち子との場合、「鋭利な刃物で切り刻まれたような鈍痛」(十)を感じている。男たちは女の快楽に奉仕する、という構図が透けて見える。

いずれにしても、武内は鈴子によって、「かつて味わったことのない、淋しい、どこにも逃げ場のない孤独感」を持つ。だが、それは鈴子のみ責任ではなく、彼女がそういう女であり、武内が彼女と性で接したせいでもある。鈴子は愛情で結びついたり言うよりも、生きる(食べる)ために武内と関係を持ったのである。

武内が天王寺に日用品店を持った時、鈴子は、

朝から晩まで店先に立って、ひっきりなしに訪れる客たちの相手をしていた。商売のコツが判つていくにしたがつて、鈴子はいつそう若やいで見えるようになった。(二)

二人の生活は順調のようだが、問題は鈴子の男客への媚びであり、「鈴子をめあてにやって来る男」たちの肉体的接触に、「どこかに、そんな行為を許している」ことである。当然ながら、武内と鈴子のいさかいになる。武内は暴力を振るう。だが、鈴子の媚態と武内の性欲により、「いつも同じ手口にかかって、鈴子の体を欲ばせる結果で終る」。話し合いも相互理解もなく、性がこの二人を結びつけている。

彼女は自分の奔放な性を自覚している。その後、政夫が生まれる(昭和二十三年)が、二人の関係は変わらない。このまま何もなければ、夫婦として安定したかも知れないが、二年後、二人の前に「乞食みたいな、得体の知れない陰気な」「易者の真似事をしながらその日の糧を得て、あとは海の絵ばかり描き続けている」杉山が現れる。易的中率の高さと「人の魂に忍び入ってくる」「杉山の描く海」が彼を目立たせるが、彼の描く海は、「明るい、ほのぼのとした色調の奥に、観る者の精気を奪うような冷たさ」がある。杉山は、心の奥に虚無を抱えている、戦後の一典型の人間である。

酒井英行氏は杉山を、「戦後の豊かさの神話を解体する神として君臨する」<sup>(5)</sup>とするが、杉山に「人間の『夾雑物』を浄化する」力はあ

るものの、それは彼の虚無感の範囲でしか効力を持たない。後年、杉山に再会した武内は、その姿に、「釜ヶ崎のドヤ街に住みつき、お前は市井のゴミ屑みたいに果てていくのに違いがない。夢も望みもあつたであろうが、いまやそうやって朽ちていくことを、お前はちゃんと知っているにちがいないのだ。」(九)と思う。杉山の本質は変わらない。

彼は武内に一家離散を予言し、鈴子と関係を結び、息子の政夫ともども出奔する。世事に消極的な杉山が鈴子を誘つたのではなく、鈴子が杉山を誘つて出奔したのである。

#### 四 鈴子と武内——再会と鈴子の死、その後——

後日、鈴子は天草での杉山との生活に窮して、武内のもとに帰ってくる。武内は会わないと言つたが、親友の吉岡に「そやけど、息子の顔はみたいやろ」の言葉で会うことにする。

それまでずっと視線を合わそうとしなかつた鈴子が、やっと顔をあげたので、武内も改めて目を向けた。そして、はっとした。鈴子はやつれていたが、美しくなっていた。武内にははつきりそう思えた。絶望感が、体中を包み込んできた。(二)

二年ぶりに見た鈴子が生活苦で醜くなっていたら、武内は安堵したろう。だが、彼女は「やつれていたが、美しくなっていた」。杉山が鈴子を美しくさせたのである。激情に駆られて、武内は鈴子に

言う。

「ようもぬけぬけと、俺の前に顔を出せたな」

「……」

「食えんようになったから、あつさり舞い戻って来たんか」

鈴子は何も答えようとしなかった。

「食えんかったら、パンパンでもやれよ。どんな乞食とでも、寝れる女やないか」

それきり長い沈黙があった。

(二)

彼女は「じっと武内を睨みつけ」、

鈴子は一語一語、武内に突き立てるように言った。

「うち、死にたいねん。…あんだ、うちを、殺してエな」

武内は無意識に立ちあがった、よし、殺してやると胸の内で呟きながら、

「あんな男のどこがええんや」

と訊いた。口がしびれたみたいになっていった。鈴子の目が、立ちあがった武内の顔を追って、強い光を帯びた。

「好きになってん。…うち、気が変になるくらい、好きになってしめてん」

鈴子の目がすわっていた。彼は満身の力で、鈴子の横腹を蹴った。鈴子は腹を押さえてうずくまり、もう一度蹴られようとするみたいに上体を伸ばして唇を噛んだ。鈴子が本気である

ことを武内は知った。殺されようとしていることも、気が変になるくらいに杉山を愛したことも。

(二)

鈴子は杉山ほど、武内を愛していなかった。生活を安定させ、性の世界に導いたのは武内だが、それは愛情溢れたものではなかった。武内は鈴子の心よりも、体を愛している。杉山は彼なりに鈴子を愛したのではないか。だが、杉山の生活力のなさ（または虚無感）による貧窮が、鈴子を大阪に戻らせる。

彼女は食うために、そして政夫のために帰った。出奔時、二歳の幼児を武内の元に残すわけにはいかなかったし、帰ったときも、「政夫を手放すことだけは拒み通」す。そんな鈴子を見て間に入った吉岡も、「今が、一番母親を必要な時期やろなア」と言い、「政夫が小学校にあがる歳まで鈴子が育て」ることになる。

彼女は工場に勤めるが、鈴子の病氣―武内に腹を蹴られたことによる腎臓悪化―もあり、武内は政夫の小学校卒業まで養育費を払い続ける。

三年後政夫を引き取るために、武内は鈴子のアパートを訪ねる。男がいるかもしれないと思いながら会うと、「意外に明るい表情の鈴子が別段驚いたふうでもなく自分を迎え入れたことで、不思議な心の安らぎを覚え」る。

鈴子は腎臓の悪化を武内に告げる。「あなたに蹴られて、しばらくたってからや」「うちが悪いんやから、何とも思てへんけど、ただちよっと耳に入れ」と言う。武内は自分の暴力を反省して、「不思議な心の安らぎ」もあり、彼女が「身を寄せてき」

たとき、彼は「まるで他人の妻を盗むような思いになって」、再び関係を結ぶ。

その後、彼は「毎週土曜日の夜を鈴子のアパートで過ごす。

我ながら、だらしない話だと思いつつも、鈴子のところどころと動く唇やら体やらに魅かれるのである。夫婦だったときにはそれほど感じられなかった鈴子のなまめかしさに、武内は心がときめくのだった。結局、武内は政夫を鈴子から奪うことは出来なかった。そればかりか、体の不調を理由にメリヤス工場の勤めを辞めてしまった鈴子の生活費まで引き受けるはめになったのだった。

(二)

武内は彼女に惹かれるが、腎臓の悪化や歳を取ったこと、および杉山とのつらい体験が奔放な性を抑えたのか、二人は破綻もせず、夫婦として日々を送る。

彼女が死ぬ数年前、家族で京都に遊びに行き、骨董品屋で鈴子は翡翠色の水差しを見つめる。

だが、武内は、そんなちっぽけな水差しよりも、それを見つめている鈴子の目が気になった。懐しさをあらわにして、遠くからやって来る人を待ち受けている、そんな目をしてショーウィンドウの中の水差しを見ているのである。

(二)

なぜ彼女が水差しに執着したかは、四章で明らかになる。店の客

である加山が、この水差しから「いなかの海を思い出す」と言う。

武内はその場に立ちつくし、振り返って水差しに目をやった。烈しく胸を衝かれてそこに立っていた。杉山が描いていた海の色を思い出したのである。(中略) そうか、鈴子は、そんなにもし烈しく、あの杉山を愛したのかと思った。鈴子は二十年前のあの日、骨董品屋のショーウィンドウにあった翡翠色のギヤマンを目にして、杉山の描く海の色を懐しく思い浮かべ、身も心も焦げる思いで自分の中の何物かを押し殺していたに違いない。鈴子はギヤマンを見ていたのではなく、そこに杉山の姿を見出していたのか、と武内は思った。

(四)

鈴子は、生活力はあっても自己中心的な武内よりも、「気が変になるくらい」杉山を愛した。だが、武内も彼なりに鈴子を愛するようになる。彼は鈴子の死後、彼女を死なせたことを悔い、彼女の心「身も心も焦げる思い」を知り、「かつてない思いで、鈴子を愛おしく不憫に感じ」(四)る。

その後、武内はユキの手引で杉山と会い、「なんで鈴子はあんたと別れて、天草から私のところへ帰ってきたんですか」(九)と聞く。杉山は「口を開こうとして、思い直したように唇をきつく閉じてしま」い、杉山と鈴子の物語は語られない。虚無感を持った杉山に淫蕩な鈴子は何を思い、何を愛したのか。武内は孤独感を持ちながら、鈴子と夫婦生活を送ったのである。杉山の場合、孤独感を超えた虚無感とそれ故の人間への探索が、鈴子の性を受け入れ、彼女に

とつては、愛となつたのではないか。それは、邦彦を脅かす帮間の持つ淫蕩性——「一種淫猥な粘り」(五)——とは違う。

武内は煙草に火をつけ、すぐにそれを揉み消し、ウイスキーを飲んだ。そしてしみじみとした気持になつて言つた。

「鈴子は、あんたと別れとうはなかつたんやないかと私は思つてゐるんです。」

(九)

杉山の虚無感による生活力のなさが、別れの原因である。武内は鈴子と杉山を許していく。それは年月の重みと彼の成長故であろう。

杉山はなんと淋しい可哀そうな人間であるかと思つた、鈴子は、ずっと杉山と一緒にいたかたのに違いない、だが鈴子は、あの飢えの時代にあつて、万策尽きて仕方なく自分のところに帰つてきたのだ。杉山も鈴子も、なんと可哀そうだったことだらう。

(十一)

武内は杉山を通して、鈴子への思いを実感している。だが、鈴子への肉欲や怒りが消失したわけではない。

武内は一瞬、烈しい思いで、鈴子の弾力に富んだ白い体を心に描いた。ふいに涙が溢れてきた。鈴子をいまほど愛しいと思つたことはなかつた。しかも武内は、煮えたぎるような憎しみを、その愛しい今は亡きひとりの女に向けていた。

(十一)

鈴子は杉山を、「女」として愛したのである。杉山と出奔したとき、彼女は「妻」を捨てた。だが、生活力のない杉山と別れ、母として、そして女よりも妻として、武内と日々を送る。つまり、武内には生活を保障してもらい、その代償として杉山への思いを封印し、「妻」として接したのである。しかも、彼女は武内への贖罪としては、彼の暴力による腎臓病の受容があつた。性はそのとき、コントロール下にあつた。(武内と再会後、彼女の浮気はない。)

武内は、結婚時は夫と言うよりは男であり、再会後は鈴子への憎しみを持ちつつも夫であり、彼女の死後、夫であり、政夫に対しては父になろうとしてゐる。武内と鈴子は性に翻弄されるが、さまざまにトラブルの後、過去を引き摺りながらも、落ち着いた夫婦となる。武内は愛憎を生き、人生の旅人として存在する。

もう一方の邦彦は、道頓堀の奔流の中で脱出を思い、人々の中で孤独を感じる旅人として生きようとする。

「道頓堀川」は、道頓堀という生のエネルギーと、同時に「温かみ」を失い、孤独な人間存在を明らかにさせる場を設定して、他者を求めつつ独り立ちしようとする青年・邦彦と、夫(妻)・父(母)たらんと葛藤する男・武内(女・鈴子)の愛憎を描いた作品である。

## 【注】

(1) この小説は初め、昭和五十三年四月号の『文芸展望』に発表されたが、その後、原稿用紙二百枚程度の加筆をして、昭和五十六年五月に筑摩書房より刊行された。両者の違いについては酒井英行氏の論文に詳しい。(氏は前者を原「道頓堀川」、後者を定稿「道頓堀川」と呼んでいる。)酒井英行『宮本輝論』(翰林書房 平成十年九月)

本稿では、定稿「道頓堀川」を本文とする。

(2) ダニエル・ストラック氏の調査によれば、邦彦が橋と関わるのは五十四例であり、武内が二十例、まち子が十六例である。邦彦が圧倒的に多い。

ダニエル・ストラック「宮本輝『道頓堀川』研究——橋から洞察する人生——」〔北九州大学文学部紀要〕54 平成九年七月)

(3) 七章では、邦彦はヌードダンサーのさとみと一夜を過ごす、その後は「あれ以来、邦彦は一度もさとみと逢っていないかった。」(十)とある。

(4) その例が政夫とのビリヤードでの賭けや、邦彦を道頓堀に引き留めることである。

(5) 酒井英行『宮本輝論』(翰林書房 平成十年九月)

(二〇一一・九・二九 受理)